

朝倉城 中世に大規模造成

高知大考古学研究室が調査

県史跡・朝倉城跡(高知市朝倉丁)の「西の段」でのほぐし、高知大学考古学研究室による発掘調査が行われ、中世に大規模な土地造成をして築城が進められた痕跡が確認された。

山氏の居城。同研究室は朝倉城跡を2015年から調査し、本丸に当たる「詰の段」などで毎年発掘を行っており、今回が6回目の調査となる。

朝倉城跡は、標高102坪の城山に築かれた本

「詰の段」西側の「西の段」(約200平方坪)は、建物を建てたり兵士を待機させたりする平た

ん部「曲輪」の一つ。今回は北東部に調査区を設け、高知大の宮里修准教授と学生が3月1〜14日に遺構や造成状況の確認を行った。

北東部には曲輪の出入り口「虎口」とみられる遺構が残存し、曲輪の端部で15〜16世紀に盛り土や敷石をして造成をした痕跡を確認。矢倉などの建物遺構は確認できなかった。

宮里准教授は「西の段は規模が大きい曲輪で、山を削って造成され、土塁もめぐらせていた。詰の段と西の段の間にある井戸の段の堀切は、かなりの土を掘り上げて造られている。全体に大規模な造成が行われており、調査を継続して城の全体像を明らかにしたい」と話している。



朝倉城跡西の段で行われた発掘調査(高知市朝倉丁)